

「商人は値段次第に売る。安ければ品物が悪いかあるいは数が少ない。

「諸君が労働者にいい賃金を払えば、労働者は諸君にもっといい労力と熟練とを供給しよう。」

「もし諸君が労働者に十分な賃金を払わなければ、諸君は一元出して二円の帽子を要求する権利がないと同じように、またいい質と量との労働を要求する権利がない。」

すなわちゴオ・カンニイとは、「安かろう悪かろう」の定則を組織的に応用したものである。しかしただこれだけのことではない。さらにこの定則から、資本家の貪慾と戦う労働者の意志の種々なる表現が分れ出た。そしてこのゴオ・カンニイすなわちサボタージュは、生産を遅らすことと粗雑に生産することの外、さらに商業にも及び、ついに生産機械の破壊にまで進んだ。

これだけのことが分らないと、『新しい英字』の著者等のごとく、いい加減な出鱈目を言うようになる。

まずは御注意まで。

解説／大沢正道

この巻は、社会哲学的な認識と思想方法論を主題とする論文、および同時代人に対する論争的な評論その他を収録した。一九一三年（大正2）から二二年（大正11）、年齢でいえば二八歳から三七歳の十年間にわたって書かれたものである。

大杉の哲学ないしは思想は、いっばんに「生の哲学」の一種とされている。一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて流行したいわゆる「生の哲学」は、ショーペンハウアーを祖とし、ニーチェ、ベルグソン、ディルタイ、ジンメルらによって代表されるといわれている。それはこんにちの実存哲学のような位置を、当時の哲学思想界で占めていたのである。

俗流マルクス主義者たちは、これまで唯物論対観念論の図式を機械的に適用して、「生の哲学」は観念論であり、したがってブルジョアないしプチブルジョアの哲学である、したがって、その立場に立つ大杉のアナキズムは必然的にプチブルジョア急進主義にすぎぬ、と片づけ

てきた。いいだものような、一見ハイカラなマルクス主義者でも、血筋は争えぬと見え、ついにこの域を越えることができずにいる。

しかし、思想を固定した概念でとらえ、それを将棋の駒のようにあちこち動かしてみる思想的方法によって、真実が明らかにされえないことは、こんにち次第にひとびとの認めるところとなりつつある。

大杉の場合にしてもそうである。問題は「生の哲学」に立っていたという形式的なことではなく、大正初期の時点でも、当時、もっとも時代の尖端をいっているときとされていた「生の哲学」(当時、哲学界でそのような用語が使われていたかどうか知らないが)という新思想を取りいれながら、それをどう日本の社会主義運動の発展のバネたらしめようとしたか、という点にこそあるのだ。

大杉が「赤旗事件」のために二年六カ月の酷刑に処せられ、出獄してきたのは一九一〇年(明治43)のことであった。その時はすでにいわゆる大逆事件が起り、社会主義運動はまったく息の根を止められたかにみえた時代であった。

大杉は、彼より二カ月早く出獄した堺利彦がおこした売文社に入り、生計を立てると同時に同志間の連帯の温存を計った。売文社は明治の社会主義者の残党を結集して、その最後の拠点となり、やがて大正期の社会主義の展開の苗床の役割を演ずるのである。その意味からいえ

ば、この売文社方式をみずから立案し、主宰した堺のアイデアと見識はなみなならぬものであったといえよう。

けれども、雌伏十年ならぬ二年足らずで、大杉と荒畑が売文社を去って、あらたに近代思想社をおこした時、彼らの実行を内側から支えた思想は、いわゆる明治の社会主義ではなかった。明治の社会主義のたんなる継続によって、彼らはあのきびしい思想弾圧のあらしに反抗して立上ることはできなかったのである。

また、売文社のすぐれた知恵者である堺の正統的マルクス主義からも、そのようなエネルギーは出てこなかった。その客観主義的な側面から出て来るのは、歴史の必然を信じ、隠忍して時機を待て、とするいわゆる待機主義の思想であった。

大杉らは、別のところに彼らの実行を裏づけ、推進してゆく思想のエネルギー源を求めなくてはならなかった。「生の哲学」はそのエネルギー源の一つたりえたのである。逆にいえば、大杉は「生の哲学」から主観主義的な、非合理主義的なエネルギーを引き出すことによって、堺らの待機主義と対決し、それを克服してゆこうとしたのである。

この巻に収めた「生の拡充」、「鎖工場」、「生の創造」、「正気の狂人」、「賭博本能論」等々の諸論文は、いずれもこの大杉の闘いぶりをよく物語っている。

大杉において、「生の哲学」はなによりもまずこのような意味をもっていたのであるが、そ

こから派生した副産物として、それは明治の社会主義を大正の社会主義へと展開させる一つの、この役割を果すこともなった。その契機となったのは、狭い意味の生と理解された自我の概念であり、もうすこし一般的にいうならば個人の観念である。

大杉らによって導入された自我ないしは個人の観念をつうじて、日本の社会主義はみずから近代化すると同時に、日本自体の近代化のエネルギーたりうる端緒をつかんだのである。けれども、この端緒はついに端緒のままに立枯れてしまい、自由で多彩な流れを擁した大正の社会主義は、硬直した、教条的な昭和の社会主義へとその位置を譲らざるをえなくなる。

このような変化の原因が、ロシア革命のポリッシュヴィキ的「成功」と、コミンテルンの成立という国際情勢を主要な要素にしていることはいまでもないが、しかし、その責任の一端は、「知識の手淫」と自嘲して、豊かな未来をはらんだ雑誌『近代思想』を廃刊した大杉自身にもあるといえよう。

この巻を読んで読者も気づかれたように、大杉のなかには非合理的な、飛躍する意識と、それを抑制する合理的で客観的な意識との葛藤がみられる。前者は、いうまでもなく、「生の哲学」によって裏づけられ、かきたてられたものであり、後者は、クロボトキンその他の科学者の影響である自然科学的な認識をその基礎にもっている。

たとえば彼は、「正気の狂人」のなかで、次のように言っている。

「……そこへ登って行く努力がしたいのだ。自分ばかりではない。他人にもまた、この努力と行為とを、勧告したいのだ、強制したいのだ。これのできない奴輩は、またこれをなそうとも思わぬ奴輩は、僕のいわゆる衆愚だ。歴史の創造に与からない怠惰者だ。」

一方、「生の拡充」には次のような文句がある。

「……実行とは生の直接の行動である。そして頭脳の科学的洗練を受けた近代人の実行は、いわゆる『本気の沙汰でない』実行ではない。前後の思慮のない実行ではない。あながちに手ばかりに任じた実行ではない。」

大杉が、その思想方法を説いている「個人的思索」は、ごく素朴な自然科学の方法の主張であり、「思索人」もまた、おなじような視点に立っている。しかし、同時に、それらの論文のなかに、「超人」とか「衆愚」という一種の飛躍したエリート意識が混在しており、両者の葛藤は矛盾のまま、平和共存させられている。

この論理の不整合、不徹底を、大杉は彼一流のムード的な非合理主義でカバーするのであるが、じつはそこに一つの落とし穴があったのである。「生の哲学」は、彼にとって新しい社会主義を展開してゆくためのバネとして役立ったが、同時にそれは、新しい社会主義を挫折させるバネでもあった。

大杉が残したこの問題には、たとえばハーバート・リードが『詩とアナキズム』のなかで、

精神分析の理論を適用して解答の糸口を示唆しているが、こんにちに持ち越されているといえる。そういうことからいうならば、あの時代に、問題の所在を身をもって提示しただけでも、すぐれて先駆的であったのかもしれない。

* * *

以下、この巻に収録した論文、書評の初出の場所および発表年月、版による表題、内容の異同等を列記する。

- 『生の闘争』自序 『生の闘争』(一九一四年一〇月・新潮社)。
『正義を求める心』自序 『正義を求める心』(一九二二年八月・アルス)。
思索人 『近代思想』一卷四号(一九一三年一月)。
奴隸根性論 『近代思想』一卷五号(一九一三年二月)。
征服の事実 『近代思想』一卷九号(一九一三年六月)。
生の拡充 『近代思想』一卷一〇号(一九一三年七月)。
鎖工場 『近代思想』一卷一二号(一九一三年九月)。
イグノラント 『近代思想』一卷一二号(一九一三年九月)。

- 生の創造 『近代思想』二巻四号(一九一四年一月)。
知識の手淫 『近代思想』二巻八号(一九一四年五月)。
正気の狂人 『近代思想』二巻八号(一九一四年五月)。
賭博本能論 『近代思想』二巻一〇号(一九一四年七月)。
秩序紊乱 『平民新聞』二号(一九一四年一月)。
野蛮人 『平民新聞』三号(一九一四年二月)。
新事実の獲得 『新潮』一月号(一九一五年一月)。
自我の棄脱 『新潮』五月号(一九一五年五月)。
事実と解釈 『近代思想』三巻二号(一九一五年一月)。
『社会的個人主義』(一九一五年一月・新潮社)に所収。
個人的思索 『近代思想』三巻四号(一九一六年一月)。
僕等の自負 『文明批評』一号(一九一八年一月)。
正義を求める心 『文明批評』一号(一九一八年一月)。

国泥棒の見本 初出不明。一九二〇年七月の日付けが稿末にある。『未刊大杉栄遺稿』(一九二八年一月・金星社)に所収。

直接行動論 『労働運動』二次二号(一九二二年二月)。

政府の道具共 『東京毎日新聞』三月二日号（一九二二年）。のち「先ず奴等を叩き倒せ」と

改題して『労働運動』三次三号（一九二二年三月）に掲載。

靈魂のための戦士 『改造』九月号（一九二二年九月）。

茅原華山を笑う 『時事新報』（一九一五年三月）。

再び茅原華山を笑う 初出不明。稿末に一九一五年七月の日付けがある。『社会的個人主義』に所収。

茅原華山論 『中央公論』一二月号（一九一五年十二月）。

二種の個人的自由 『近代思想』三卷二号（一九一五年一〇月）。

飛行術的言論家 『文明批評』一号（一九一八年一月）。

盲の手引する盲 『文明批評』二号（一九一八年二月）。のち「民主主義の寂滅」と改題して

『自由の先駆』（一九二四年三月・アルス）に所収。

国家学者R 『文明批評』二号（一九一八年二月）。

民族国家主義の虚偽 初出不明。稿末に一九一八年四月の日付けがある。『自由の先駆』に所収。

革命的サンジカリズムの研究 『労働運動』一次五号（一九二〇年四月）。

米田博士へ 『労働運動』一次六号（一九二〇年六月）。

怠業と勤業 初出不明。稿末に一九二二年一月の日付けがある。

Syndicalism の研究 『近代思想』一卷四号（一九一三年一月）。

『現代八面鋒』 『近代思想』一卷四号（一九一三年一月）。

『社会主義倫理学』 『近代思想』一卷六号（一九一三年三月）。

『現代思想講話』 『近代思想』一卷七号（一九一三年四月）。

『大日本閥門史』 『近代思想』一卷八号（一九一三年五月）。

『オイケン哲学の批難』 『近代思想』二卷一二号（一九一四年九月）。

『新しい英字』 『平民新聞』三号（一九一四年十二月）。

大杉栄選 無政府主義の哲学 I 奥付 大沢正道編者代表
現代思潮社刊 一九七一年三月三十一日初版 六〇〇円 株
式会社文栄社 本文印刷 広橋精版印刷株式会社 表本印刷 今
泉誠文社製本

株式会社現代思潮社 東京都文京区小日向一丁目二四一八 電話営
業部代表 (九四三) 四四〇六 出版部代表 (三五三) 八一〇一
振替東京七二四四二 郵便番号 一一二

© Masamichi OSAWA, 1971.
0395-67004-1909